

NARO RESEARCH PRIZE SPECIAL II

高温登熟性に優れたおいしいお米「恋の予感」

水稲「恋の予感」開発グループ

出田 収¹⁾、中込 弘二¹⁾、重宗 明子¹⁾、石井 卓朗²⁾、松下 景³⁾、春原 嘉弘⁴⁾、前田 英郎³⁾、飯田 修一⁵⁾（¹西日本農業研究センター、²次世代作物開発研究センター、³中央農業研究センター、⁴北海道農業研究センター、⁵元近畿中国四国農業研究センター）

研究の目的・背景等

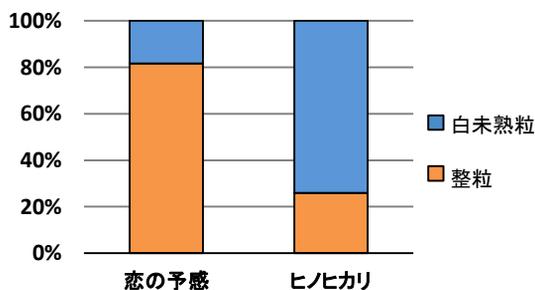
「ヒノヒカリ」等の西日本地域で栽培されている水稲では、近年、登熟期間中の高温の影響で白く濁った未熟粒（白未熟粒）が多発することが問題となっている。このため、「ヒノヒカリ」に代わる登熟期が高温でも白未熟粒の発生が少ない良食味品種が求められていた。

研究の概要

水稲品種「恋の予感」は、登熟期が高温の年でも、白未熟粒の発生が「ヒノヒカリ」よりも少ない。「ヒノヒカリ」よりも多収で、高温に強い品種「にこまる」よりも穂いもちや縞葉枯病に強い。食味は「ヒノヒカリ」並に良好である。公募により「ひとたび食べると恋するようときめきや情熱が溢れでてくる気持ちになるようなお米になって欲しい」という地域の期待を込めた名前がつけられた。広島県で奨励品種に採用され、2017年度には、同県平野部の「ヒノヒカリ」の作付面積の約6割（約3,200 ha）が置き換わる計画となっている。水稲品種「恋の予感」は西日本の各地の生産現場においても試作が行われており、今後、一層の普及拡大が期待される。



「恋の予感」草姿



高温年(2012年)に収穫された玄米における整粒（白濁等のないお米）と白未熟粒との比率